

## 受賞記念講演：「李御寧氏のご功績を偲んで」

荒井 正吾 奈良県知事

李御寧先生には、2010年に、故中曽根康弘元首相が提唱された「日中韓賢人会議」が奈良で開かれた際に、初めてお目にかかりました。そのとき、知識だけではなく、物事の理解が大変深い方だなという印象を受けたのですが、その後また機会を得て、直接お話を伺うことができました。

先生は、韓半島や東アジアの歴史、ひいては世界の歴史に対する造詣が深く、文化と結び付けて、人間の本質について多くを語っていただきました。「知の巨人」という呼び方がありますが、まさに先生のことだと思います。私がこれまでお会いした中でも、文化に対する造詣、またその理解、お気持ちなどがとても深い方でした。素晴らしい方にお会いできたことに、心から感激したことを覚えています。

また、先生は日本語も堪能でしたので、奈良県立大学の学長になっていただこうと思い、先生に申し出たところ、「いいですよ」とおっしゃっていただいております。しかし、先生を慕う方から、「ソウルを離れないでほしい」と引き留められたこともあり、残念ながら実現しませんでした。「それでは学長は無理にしても、名誉学長になっていただけないか」とお願いし、亡くなられるまで名誉学長になっていただいております。

そのような関係から、私がソウルを訪れた際には必ず訪問させていただきました。とてもお話が好きな方で、2時間でも3時間でもお話くださり、その内容は今でも私の宝となっています。

その中で一つ思い出されるのは、奈良の「あすか」という地名の話です。行政の地名では漢字で「明日に香る」という字を当てて「明日香」（あすか）と読んでいるのですが、通常

は「飛ぶ鳥」と書いて「飛鳥」（あすか）と読んでいます。なかなか読みづらいわけですが、「どうしてですかね」という話になりますと、「ハングル語で『ナルダ(날다)』という字を当てると共通するのですよ。ハングルの辞書を引きますと、『ナルダ』というのは『明日』という意味と『飛ぶ』という2つの意味がありますから、誰かがその『ナルダ』という字を結び付けて、『飛ぶ鳥』という字を当て、『飛鳥』としたのではないのでしょうか」ということでした。「飛鳥」というのも「明日香」というのも、とても良いイメージを与える字です。明日のまちというような、そのようなまちを想定して、おそらく韓半島から来られた人がそのような漢字を当てたのではないかなと思います。

これまでの思い出は尽きません。たくさんの知識、人間への理解、民族への理解について、多くのことを教えていただきました。

改めて弔意を表させていただくとともに、間もなく一周忌を迎えるわけですが、本日、韓国からお越しいただいた奥さまが、これからもお元気で健やかに過ごされることをお祈り申し上げまして、李御寧先生をお偲びいたします。李御寧先生によろしくと申し上げたいのですが、声が届きませんので、ここで気持ちを込めて、李御寧先生を偲ばせていただきたいと思います。大変お世話になりましたことを心から感謝申し上げます。

